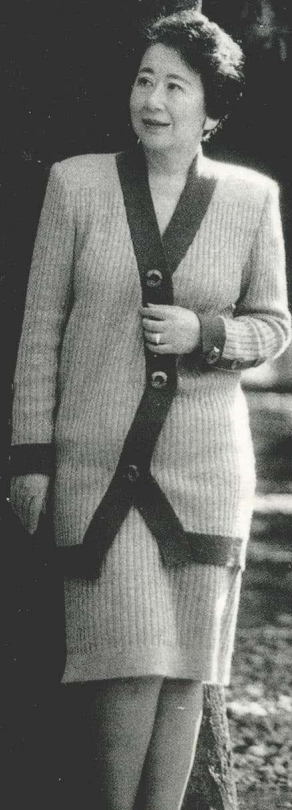


桐島洋子

続・林住期ノート

しずく
刻の



刻しるしのしずく

続・林住期ノート

一九九一年四月十日 第一刷発行

著者 桐島洋子

装幀 後藤晴彦

発行者 鈴木 勤

発行所 株式会社 世界文化社

東京都千代田区九段北四一―二二九

(郵便番号) 一〇一一

電話 (〇三) 三三六二一五一一 (代表)

印刷製本 中央精版印刷株式会社

禁無断転載・複写

定価はカバーに表示してあります

©1991, Yoko Kirishima. Printed in Japan

刻きりぎりのしずく

世界文化社

続・林住期ノート

とき
刻のしずく

第一話

「碧水楼」の行方 ————— 5

第二話

ヴェトナム感傷旅行 ————— 21

第三話

遂にアンコール・ワット ————— 39

第四話

花を咲かせる人々 ————— 55

第五話

ざわめくドレスリング ————— 71

第六話

魔女たちへの応援歌 ————— 87

第七話

不思議世界の扉を開く

103

第八話

おまじないは三つのR

119

第九話

吹き抜けの回廊で

137

第十話

潮も叶ひぬ今は漕ぎ出な

153

第十一話

方舟の休暇

169

第十二話

「白鳥の歌」と不思議猫

185

あとがき

202

第一話

「碧水楼」の行方

帰るべき故郷のある人を羨むようになったのは、折り返し点を過ぎた頃からである。

「盆暮れはイナカに帰ります」なんて一度言ってみたものだけけれど、東京で生まれ、国の内外を転々としながら育った私に、イナカというものは存在しないのだ。

あちこちに懐かしい場所はあるから、そのさまざまな記憶がパッチワークのように故郷のイメージを形成している。折り返し点以来、私はそのイメージの故郷を探し求めて旅をしていたのかもしれない。

「あ、もしや、ここでは」

と心が騒ぐ場所は幾つかあった。それが何故か外国ばかりで、とりわけカナダのヴァンクーヴァーは、ほぼ完璧に私のイメージを満たしているように思われた。私の「故郷」にはまず海が不可欠だが、それも少女時代の大半を過ごした葉山の海のように、母性的な優しい海の懷に抱かれて、しかもみずみずしい緑とも相擁して暮らしたい。穏やかな内海に面して豊かな森に囲われたヴァンクーヴァーなら、その点、まことに申し分ない。

また、英国を主としてドイツやフランスも少しずつ混ざったヴァンクーヴァーの雰囲気は、幼児期を過ごした国際都市上海の共同租界に通じるし、ここは本当に上

海かと錯覚するくらい中国人が多く、その生活習慣がたくましく根付いている街である。そして食べ物が減法美味いし、人々も親切だし、今どきの慌ただしい流行などには超然とした自然な流れに身を浸して自分を取り戻せるのが、メリーゴーラウンドのような東京の暮らしに疲れた私には何よりも嬉しい。だから私は、ヴァンクーヴァーへの「帰郷」をかなり真剣に考慮中なのだ。

ところが最近、日本でも素晴らしい「故郷」を発見してしまった。いや発見というよりも、たまたま人に誘われていたところへ、ポツカリ一週間の暇ができた弾みでのこのこと出掛けた先で、思いもかけない懐かしさにメロメロになるという他力本願の邂逅である。

時々講演にお招きを頂いている教育総研という会社がある。これはいわゆる学習塾の大手組織だが、私はうちの子供を一度も塾に通わせたことがないし、そもそも受験教育に批判的で初めから日本の学校制度を外れた道を選んだくらいだから、こういう業界には全く無関心で、かなり名高い塾であるらしい教育総研の名前も知りはしなかった。しかし、西沢社長や逸見常務をはじめとするこの会社のスタッフと幾度かおつきあいしてみたら、それが現代の学校ではなかなか出会えない真★な教育者集団で、その本物の情熱に私もどんどん巻き込まれて、子供たちの未来への危

機感や使命感を共にする同志として意識するようになった。

せいぜい必要悪という「負」のイメージでしかなかった塾の存在を、もっと積極的に評価して、子育てを終えた私自身がもう一度気を取り直し、個人の枠を越えて育児や教育の問題に向き直る基地として、この塾と関わり合っていこうという気持ちになったのである。

十数年前に私が大休暇をとってアメリカの田舎に隠遁し、自然の中で子供たちと遊ぶ存分取っ組み合って生活教育をしたのは、母親として最も満足な経験だった。また、夏休み中は連中をサマー・キャンプに送り込んで、こちらは大人の旅を楽しんだのも正解で、彼等はまた一回り大きく逞しくなっていたし、親離れ子離れの予習にもなった。

その辺りの話にとりわけ関心を持たれた逸見さんと、日本でもそんなキャンプを設営しようとか、子供だけでなく母親の自立のためのプログラムも作ろうとかいった企みを語り合っているのだが、そのあらまほしきキャンプのイメージが、私の「故郷」のイメージとびったり重なるのである。

逸見さんは社の本部がある大阪に単身赴任中だが、以前勤務地だった広島を離れ難くてそのまま居を定めておられる。彼から、「是非一度いらしてゆっくり

ホテルの窓から見た瀬戸内海の夜景



とご滞在下さい。きつとお気に入ると思いますから。それに子供たちのキャンプによさそうな無人島や、母親の子離れツアーに絶好の施設も周りがあるので、それも見えておいて頂きたいのです」

と前々から勧められていたのが、福山から瀬戸内海に身を乗り出した沼隈半島の丘に建つ進藤会館というリゾート・ホテルである。

ここ沼隈町常石は常石造船の本拠地で、このホテルも本来は造船関係者の接待所として設けられたものらしく、一般向けのホテルとしてはまだサービスがぎこちないのだが、部屋に入った途端、窓の景色にガーンと圧倒されて、このほかに何を求める必要があるかと思ってしまう。光の綴れ織りのような海面に、緑深い島々がそれ以上は考えられない絶妙なバランスで配置されたこの構図こそ、瀬戸内海の最も見事な景観に違いない。さらにその中心に豪華な夕陽があかあかと熟れきった身を静かに沈めていく美しさと来たら、ただ「参った」と呻いて呆然と立ち尽くすだけだった。

「日出る国の天子より、日没する国の天子へ」と書いて相手を激怒させてしまった天子が居られたけれど、どちらの天子もこの天孫降臨の現場のように荘厳な日没を見たら気が変わったかもしれない。

一日はひたすらに窓を眺めて茫々と過ごし、次の日はホテルの丘の下の方から瀬戸大橋の途中の与島まで往復するサウンド・オブ・セトという五千トン程の白い観光船に乗ってみた。これは、かつての連絡船などとは全然雰囲気の違いが感じられる船で、ステージ・ショウやデイスコやギャラリもあれば、サウナやジャグジーを備えた浴室もあって、一日乗っていても退屈する暇はなさそうだが、私は海と島を眺めるだけで十分だから、ずっと甲板でデッキ・チェアーに寝そべっていた。

ついこの間に超能力の取材をした余韻なのか、妙にUFOが恋しい。随分前のことだが、ニュー・メキシコ州の砂漠をドライブしていて、「この辺ってよくUFOが出る場所なんですよ」と言いながらふっと空を眺めたら、まさにそのUFOかしらと思えない物体が、物理的にはありえない不思議な身動きで現れたので文字通り仰天したことがある。ここでもう一度あれに逢いたいと、何故か切ないほど思いながら見上げていた瀬戸の空には、結局何も現れなかったけれど、ともかくそんな気分が漲る深い空なのだ。私をエスコートしてくれている常石エンタープライズの竹島さんに、

「あなたはUFOなんて阿呆らしいと思う？」とおそろおそろ聞いてみたら、

「とんでもない。当然あると思ってますよ。この広大な宇宙で文明があるのは地球

ただだなんて、地球人の思ひ上がりでしょう」

という返事にホツとして、にわかに話が弾みだす。彼は古代史の研究が趣味で、私の故郷探しなどとはスケールの違う卑弥呼の故郷探しに熱中しているのだ。

船上の昼食はフランス料理のフルコースで、昨年鳴り物入りで人を集めたクイーン・エリザベス二世号のディナーよりよっぽど上等だった。これは同窓会のようなパーティーにお誘え向きのクルーズではないか。私が幹事のときに提案してみよう。日本にもようやく船旅ブームが到来しつつあるようで、続々と豪華客船が建造されていることだし、そういう本格的な航海に乗り出す前のリハーサルとしても、これはおすすりである。

往復で七時間ほどのクルーズだが、私は与島までの片道にして、瀬戸大橋から吉備路をドライブして福山に帰ることにした。常石エンタープライズの専務の川本さんが自ら車を駆って与島まで迎えに来て下さって、今度は陸路の素敵なクルーズが始まった。この辺りは水陸両用というか、どちらを通っても実に結構な所なのである。快い弧を描いて瀬戸の周辺を巡りながら私はいつも求心的に常石を意識していることに気がついた。あの夕日と同化したように同じ構図の中に帰っていくのが当然だと思っているのだ。私は遂に帰るべき「故郷」を見付けたのだろうか。

途中、倉敷に立ち寄ってしばらく散策したときも、見事な町並みや、大原美術館の豪勢なコレクションを楽しみながら、近くにこんな町があれば遠来の友達を案内するのによいしと、早くも隣組気分なのである。

しかしいやすくも世界を駆け巡る旅人たる私が、景色が綺麗だというくらいのこととでこれほど他愛なく陥落する筈がない。このただならぬ懐かしさは一体なんだろう。広島県なんて、先祖代々なんの御縁もない筈だし、仕事で来たことも数えるほどだ。新幹線の駅ができるまでは、福山というところがあることさえ知らなかったのに。

この懐かしさは土地だけでなく人間にも及んでいる。いや人間の方が大きな要素なのかもしれない。張本人の逸見さんは勿論のこと、その親友の川本さんからどんな連鎖的に知り合って行く地元の方々に、初対面の途端に旧知のようにスッと馴染んでしまう。普段は引っ込み思案で人見知りの強い私としては実に珍しいことなのだ。

奥様づきあいにはさらに苦手な筈なのに、西沢夫人や逸見夫人とは瞬時に馴染んで、この日は女三人のにぎやかな宴になった。ふんわりと形をなして来た包圍網が心に暖かい。

進藤会館の庭園で。瀬戸内海を眺める



進藤会館に一週間滞在する予定だったのに真ん中の一日に急にテレビの仕事が入ってしまった。NHKの「漫画で見る古典」という番組である。『蜻蛉日記』の部で、藤原道綱の母と私が、子育てや子離れをめぐる思いをしみじみと語り合うという趣向はちよっと面白いし、林住期に似つかわしくも思われたのでつい出演を引き受けたものの、せっかくの「帰郷」を半分で切り上げるのはいかにも悔しい。それで結局、ここを早朝に発って上京しNHKで仕事を済ませるなり常石にとんぼ帰りするという強行軍で、この滞在を維持することにした。若い頃は恋に狂えば千里の道も遠しとしなかったものだが、とみに腰が重くなった近頃の私にはあるまじき激しい身動きである。

この日から暇ができた夫も常石の残りの三日間に急遽付き合うことになり、東京駅で待ち合わせ、広島行き最終の新幹線に辛うじて乗り込んだ。座った途端に彼は隣席の人とスツと自然に話始め、道中ほとんどずっと熱心に何かを語り合っていた。「彼は広島大学の病理学の先生なんだ。いやあ、実によく話が合ってね。広島には面白い学者がいるんだなあ」と夫は興奮している。あの「馴染み」現象が、彼には早くも汽車の中から始まったようである。福山駅に出迎えて下さった逸見さんや川本さんとも案の定たちまち意気投合してしまう。「山成」という小料理屋で牡蠣や

おこぜの夜食に感激してから、お二人の夜の牙城らしい小ぢんまりと瀟洒なバー「黒髭」に立ち寄って、ナイトキャップを一杯やることになった。ギブソンを注文した彼は、それを一口啜って、「ほう」と驚きの声を上げた。

「立派なもんだ。今は東京にもこれだけのギブソンを作るバーテンは滅多にいませんよ」

それがお世辞ではないことが私には明らかだった。彼はほとんど狼狽していた。まさに彼が捜し求めていた種類のバーが、なんと福山なんて思いも及ばなかったところにポコッと現れたのだから。

「なんで広島なんだよ。それより京都にでも行って旨いもの食べようよ」

などと渋っていた彼なのに、その巨体の重量に比例するように、私よりもお速くこの土地にズブズブのめりこみ始めたようである。

翌日は川本さんがまた案内して下さって、ホテルの裏手の数万坪の山林にさまざまな凝った建物が点在する「弥勒の里」を逍遙し、江戸時代に消失した千利休の茶室を忠実に復元した秀路軒でお茶を頂いたり、神勝寺焼きの窯もとを訪ねたり、有名な備後表の織場や最新設備の版画工房を見学したりしてのどかな午後を過ごした。

ここには京都から移築した旧賀陽宮邸もあって、これがなかなか格調高く雄渾な

マリンパークのヨットハーバーからホテルを見上げる



建物なのだ。特に、桜林に面したおおらかな濡縁は、どんなにか風雅な酒宴を催せるだろうとわくわくするような舞台装置なのである。

「ここで婆娑羅の茶会をしたいね」

と私たちは異口同音に叫んで顔を見合わせた。風流といえば「侘び」と「寂び」が主流になってしまったが、「ばさら」もまた日本古来の美意識の形であった。例えば満開の桜の木の下に贅を尽くした山の幸海の幸を溢れるほどに並べ、眩い豪華を愛でながら、心に白鳥の絶唱を聴き、滅びいくものを哀惜するという華麗なニヒリズムの饗宴である。空前の豊かさにただ軽薄に酔い痴れる日本は、今こそその中に深い悲しみを掬いとる婆娑羅の美学が必要なのだ。

日が暮れてから隣の尾道市のうらぶれた小路を巡り歩いて、寿司とラーメンとお好み焼きの梯子をする。これも懐かしい時間が重たげに澱んだ港町である。東京から急速に消えていく暗がりや猥雑さが、潮の匂いと絡み合って、独特の風情を醸し出す。

「ここも得難い雰囲気の町ね」

「ああ、こんな町が近くにあったらこたえられないよ。何かにつけてとぼとぼと飲みに出掛けるだろうな」